MARX-LEXIKON
ZUR POLITISCHEN ÖKONOMIE

原典対訳

マルクス経済学レキシコン

久留間鮫造編

12

貨幣 II

1980

大月書店

久留間鮫造

1893年9月，岡山市に生まる．第六高等学校を経て，1918年，東京帝国大学法科大学政治学科卒業．1919年，大原社会問題研究所入所．1920—1922年，欧米派遣，のち引続き同研究所在職．1946—1964年，法政大学教授．1949—1966年，法政大学大原社会問題研究所所長．現在，同研究所名誉研究員，法政大学名誉教授．

主要著訳書——『経済学史』（岩波全書）．『価値形態論と交換過程論』（岩波書店）．『恐慌論研究』（大月書店）．『貨幣論』（大月書店）．グラント『死亡表に関する自然的及政治的諸観察』（栗田書店，復刻新版—栗田出版会）．レキシス『自然科学と社会科学，人間社会に於ける大量現象の理論に就て』（栗田書店）など．

現住所——武蔵野市吉祥寺南町2—25—16

マルクス経済学レキシコン・12　　貨幣II

1980年10月13日　第1刷発行　　定価 4500円

著作権者　©法政大学 大原社会問題研究所

編集者　久留間鮫造
発行者　平智享
印刷者　大星石松
発行所　株式会社 大月書店
〒113 東京都文京区本郷2-11-9
電話 (813) 4651（営業）
(814) 2931（編集）
振替 東京 3-16387

太平印刷・関山製本

マルクス経済学レキシコンの栞

No. 11

1980年10月

大月書店

「貨幣Ⅱ」の編集にあたって

——その編集方針と各項目の位置づけ——

レキシコン談話室

マルクスの商品変態論を理解する上で
とりわけ重要なことは何か、
それは「貨幣Ⅱ」の項目編成にどのように
あらわれているか

A　今回は「貨幣Ⅱ」の編集方針について先生のお話を伺うことになっているのですが、「貨幣Ⅱ」には「流通手段」にかんするマルクスの所論が収められています。ところで、マルクスの流通手段論についての先生の基本的なお考えは、すでに、昨年末に刊行された『貨幣論』（大月書店、一九七九年刊）のなかにはっきりと述べられております。『貨幣論』は、副題が「貨幣の成立とその第一の機能（価値尺度）」となっていますが、その後篇「マルクスの価値尺度論」のⅡでは、宇野弘蔵氏の所説を検討しながら、マルクスの商品変態論の真意が説きあかされ、したがってまた、マルクスの流通手段論についての先生の基本的なお考えが述べられております。ですから、それを読んでもらえれば「貨幣Ⅱ」の編集意図も基本的にはおわかりいただけると思いますが、しかし、それはそれとして、本日は、「貨幣Ⅱ」の編集に即しながら、あらためて先生のお話を伺うことにしたいと思っている次第です。

久留間　いまA君から、昨年末に出版したぼくの『貨幣論』の話が出たので、ついでにつけたしておくと、その後篇〈マルクスの価値尺度論——宇野教授の「マルクスの価値尺度論」への反批判を通して——〉で問題にした宇野君の価値尺度論には、大きく分けて二つの——もちろんそれらの間には密接不離な関連があるのですが——独自な見解があります。その一つは、マルクスの価値尺度論は労働による価値の規定を前提にしている点でまちがっているという、いわば価値尺度論以前の問題に関連する見解であり、いま一つは、マルクスが価値尺度論につづいて展開している問題に関連する見解です。それは、一言にしていえば、マルクスが価値尺度を貨幣の第一の機能だと言っているのはまちがっていて、貨幣の第一の機能は購買手段としての機能なのだ、という主張です。『貨幣論』では、この二つの論点での宇野君のマルクス批判を問題にしたわけですが、今度の『レキシコン』の「貨幣Ⅱ」に直接関係があるのはもっぱら、このうちの第二の論点です。

B　そういたしますと、「貨幣Ⅱ」の編集の際にも、宇野さんの主張、いまいわれたところでは、貨幣の第一の機能は価値尺度としての機能ではなくて購買手段としての機能だという宇野説の誤りを明らかにすることを念頭におかれていたといってよろしいでしょうか？

久留間　もちろん、ある程度念頭にはあった。しかし、今度の「貨幣Ⅱ」はべつに宇野君だけを意識して編成したわけではない。そのことにかんして一つ注意しておきたいのは、昨年出版した『貨

幣論』の後篇では、もっぱら宇野君のマルクス批判への反批判という形で議論を展開したのですが、そのさいぼくは、マルクスの所説を援用しながら、その本当の意味を宇野君は理解していない、といって反批判したのです。このことによってもわかるように、宇野君の考えていることは、彼に独自のものというより――もちろん独自の点がなくはないけれども――根本的にはマルクス以前の、多かれ少なかれ現象にとらわれて事の本質を究明しえない俗学的な学説と共通なものなのです。だからこそ、宇野君の著書など見たこともなかったマルクスが、そのまま宇野説への反批判として通用するようなことをすでにはっきり書いているのです。現在でも、べつに宇野学派だと思っていない人々のなかに、彼と同じようなまちがった考えをもっている人がかなり多いのではないかと思われます。こんどの『レキシコン』の「貨幣Ⅱ」では、宇野説への反批判という立場から離れて、もっと一般的に、そういう俗学的な謬見を是正することを主眼にして表題をたてたつもりです。

A　では、あらためて「貨幣Ⅱ」の編成についてお伺いしたいと思います。「貨幣Ⅱ」の内容は「流通手段」で、その最初の項目は「商品の変態」ということになっていますが、まず最初に、マルクスの商品変態論の意味を正しく理解するうえで先生がとくに重要だと考えていられることは何でしょうか、そして、それは「貨幣Ⅱ」の項目編成にどのようにあらわれているのでしょうか。

交換過程論と商品変態論

久留間　まず最初に重要なのは、貨幣は実際には、商品がそれらの交換過程で当面する諸矛盾を媒介するために必然的につくり出すものだということ、も一つ具体的にいえば、交換過程に含まれている諸矛盾は、貨幣ができるとその媒介によって「それらが運動しうる形態」をもつことになるということです。「それらが運動しうる形態」というのは、さし当たっては、W―G―Wという商品の姿態変換の形態のことです。しかしこう言ったのではまだ抽象的でわかりにくいかと思われるので、一つの設例によって説明することにしましょう。

いまかりに、問題の商品がリンネルであったとし、その所有者はそれをバイブルと交換したいと思っていたとする。その場合に、たまたまバイブルの所有者の方でもリンネルとの交換を望んでいれば交換が成立するが、そうではなくて、リンネルとの交換を望んでいるのは小麦の所有者であってバイブルの所有者ではなく、バイブルの所有者はリンネルではなくてブランディとの交換を欲していたとすると、交換は成立しえない。この場合、リンネルを生産した労働は小麦の所有者の欲望――したがって社会的欲望――の対象を生産していることになるわけですから、その労働は社会的に有用な形態で支出された人間労働の一定量として、その生産物であるリンネルの価値を形成しているはずなのだけれど、それにもかかわらず、リンネルは価値として実現されえない、言葉をかえていえば、任意の他商品――この場合にはバイブル――と交換されえない。そしてこのように、価値として実現されないかぎり、それは使用価値としても実現されえないことになる。すなわち、他人のための使用価値であるはずのリンネルは、それが充足するはずであった欲望の持主――いまの例でいえば小麦の所有者――の手に移って、現実に他人のための使用価値になりえないことになる。したがって、そのままでは、商品生産は社会的生産の一つの形態として成り立ちえないことになる。

だから、商品生産が社会的生産の一種として成り立つためには、この矛盾が解決されねばならぬわけですが、それはどのようにして解決されるかというと、いうまでもなく、それが貨幣を産み出して、貨幣によって媒介されることによるのです。すなわち貨幣がで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きると、直接的な交換（W_1—W_2）は販売（W_1—G）および購買（G—W_2）の二つの過程を通して遂行されることになるが、そうなると商品所有者は彼の商品をいきなり自分の欲しいと思う他の商品と交換しようとはしないで、まず貨幣にたいして交換することになる。これが販売（W—G）ですが、この過程においては、商品所有者は彼の商品を直ちに価値として通用させようとする代りに、まずそれを使用価値として譲渡することによって貨幣に——一般的な価値の形態に——転化する。この使用価値としての商品の譲渡によって、その商品の生産のために支出された労働は社会的に有用な労働であったことが実証され、したがって商品は、社会的に妥当する価値の形態——商品世界を通じてあまねく価値として通用するもの——すなわち貨幣になる。そしてそうなったうえではじめて商品所有者は、次の購買（G—W）の過程で、この貨幣を価値として通用させる、すなわち、彼が欲しいと思う任意の他商品と交換する。貨幣になると、そうすることが客観的に可能になるわけです。（もともと普通の一商品にすぎなかった金がどのようにしてこのような特権をもつ貨幣になるかは、価値形態論で明らかにされている。）貨幣ができるまではそうはいかなかった。さきほどの例でいえば、リンネルの所有者は彼の商品リンネルが社会的欲望——小麦の所有者の欲望——をみたすものであったにもかかわらず、それを価値として実現することができなかった、すなわち、彼がほしいと思う他商品——バイブル——と交換することができなかった。こうした矛盾が、いまいったような仕方で解決されることになる。W_1—W_2が、貨幣の形成とともに、W_1—GおよびG—W_2という対立的な二つの形態変換の過程に分かれ、それらの過程的統一としてのW_1—G—W_2という形をとることによって、交換過程で考察された矛盾が解決されることになるのです。

A　いま先生が紹介された設例は、当初、一六・七年前の『思想』に三回にわたって掲載され、昨年刊行された『貨幣論』のなかに再録された『マルクスの価値尺度論——宇野教授の「マルクスの価値尺度論」への反批判を通して——』のなかに見出されるものですが、最近、これを引用して異をとなえた論文が発表されました。ご存知でしょうか。

久留間　知りません。

貨幣形成論についてのスミス等の把握とマルクスのそれとのあいだの違いはどこにあるのか

A　それは、青木書店発行の『講座・資本論の研究』の第二巻「資本論の分析(1)」のなかの〈特論、価値表現の「回り道」の論理と交換過程の矛盾——久留間鮫造著『貨幣論』によせて——富塚良三〉のなかです。この本をまだお読みではないのですか。

久留間　読んでいません。読んでいないだけでなく、そのような本が出ていることさえ知っていません。そこで富塚君は、さきのぼくの設例にどのようにいって異をとなえているのですか。

A　それでは肝腎の所を読んでみましょう。

ところで、久留間氏においては交換過程の矛盾はどのようなものとして理解されているのでしょうか？『貨幣論』後篇のⅡの八のなかの「交換過程の矛盾はどのようなものであったか」という見出しがついている個所で、久留間氏は次のように説明されております。

と言って、さきの先生の設例の前半を引用したうえで、富塚氏は次のようにいっています。

要するに、左記のような交換欲求のすれ違いによる交換の不成立、これが久留間氏の言われる「交換過程の矛盾」なのです。

では、この「矛盾」が「どのようにして解決されるかという

と、いうまでもなく、それが〔?〕貨幣を生み出して、貨幣によって媒介されることによるのです。」（同書、二三七ページ）と久留間氏は言われる。この一見わかりやすく巧みにも見える久留間氏による交換過程の矛盾の説は、価値形態論の基礎づけのもとに諸商品相互の全面的外化の矛盾を矛盾として展開しようとしたマルクスのそれとは質的に異なり、むしろ、「交換の不便」をとり除くための「交換の共通の用具」として貨幣の成立を説いたアダム・スミスのそれときわめてよく似たものであります。

といって、『国富論』第一篇第四章「貨幣の起源および使用について」からかなり長い引用をしたあとで、富塚氏はさらに次のようにいっています。

貨幣の成立は、アダム・スミスにおいてこのように、「交換の不便」ないしは「困難」をとり除くための流通用具の成立過程として説明されているのであります。この説明は、流通の媒介用具としての機能を貨幣の第一の機能とし価値の尺度としてのそれを第二の機能とする『国富論』におけるスミス貨幣論の構成と照応しているわけです。購買手段としての機能こそが貨幣の第一の機能であり価値尺度としての機能はそのうえに成り立つのだとする宇野説は事実上このスミスと類似の貨幣論構成をとるわけですが、この宇野説を批判するはずの久留間氏の「交換過程の矛盾」・貨幣成立論が、まことに意外なことに、これまたスミスとそっくりの立論となっていたわけです。このように「交換過程の矛盾」の把握が、交換欲求のすれ違いによる交換の不成立というスミスと全く同様のものに止まったのは、前述の『資本論』初版本文の「形態四」が示唆する問題にたいする無関心・問題意識そのものの欠如と決して無関係ではない、とわたくしは考えます。……（三四〇―三四一ページ）

これが、富塚氏の先生に対する非難の要点です。

久留間　そのようなことを書いているのですか。そのような途方もないことを富塚君がね。ただあきれるばかりで、まじめに反論する気にはなれない。

A　その気持はわからぬではありませんが、ただ黙殺していたのでは、実情を知らない読者は富塚氏が書いていることを本当だと思うでしょう。それをほっておくのはどうでしょうか。

久留間　でも、そのような放言を一々気にしていたらいくら命があっても足りはしない。

A　では、先生に代ってひとまずぼくが、富塚氏の書いていることがどんなに途方もないことであるかについて、ぼくなりの考えをいってみましょう。もしそれに付加または是正すべき点があったら、あとで補っていただくことにして。それでどうでしょうか。

久留間　なんともご苦労さまのことです。

A　では、ぼくの考えを率直にいってみましょう。

いま紹介した個所で富塚氏が引用して問題にしている先生の発言は、宇野氏がマルクスに反対して展開している一連の主張に対して先生が反批判されているなかの一部ですが、そこで先ず問題になっているのは、金の貨幣としての第一の機能はあらゆる商品の価値を金の一定量としてすなわち価格として表示する価値の尺度としての機能だとしているマルクスに反対して、貨幣の第一の機能は購買手段としての機能だとする宇野氏の主張です。この、マルクスに反対する宇野氏の主張の誤りを、先生は、『貨幣論』の一九六ページ以下で批判しておられるのです。ところが富塚氏はさきに紹介した個所で、久留間説はスミスと同様に購買手段としての機能を貨幣の第一の機能だとするものだといっているのですが、氏ははたして、いま指摘した『貨幣論』の部分を読んでいないのでしょうか。もしそうだとすれば実に無責任な放言ということになります。またもし読んでいながらいっているものとすれば、かなり悪質なデマというこ

とになります。

しかしいま取りあげた問題点は、宇野氏の価値尺度論をテーマにした研究会での質疑応答の脈絡のなかで先に出てきているのでまずそれを取りあげたのですが、富塚論文ではその前に、マルクスのいわゆる交換過程の矛盾の真意を久留間氏は理解していないという非難が展開されています。久留間氏が交換過程の矛盾といっているものは、実際にはマルクスのそれとはちがっていて、単なる「交換欲望のすれ違いによる交換の不成立」を意味するものにすぎず、アダム・スミスが説いていることとすっかり同じだ、というのです。

先生が交換過程に含まれている矛盾をどのようなものとして理解しておられるかは、わざわざ『価値形態論と交換過程論』をあげてみるまでもなく、いま問題になっている『貨幣論』の次の個所を見ただけでも明らかです。

交換過程論ではマルクスは、かつてぼくが『価値形態論と交換過程論』のなかで論じたように、使用価値と価値との直接的統一としての商品の内在的な矛盾が、実際に商品が交換される過程でどのような形で展開してくるかを考察しているのです。すなわち、交換過程は、商品が使用価値として実現されねばならぬと同時に価値として実現されねばならぬ過程なのですが、この商品の使用価値としての実現と価値としての実現とは、相互に前提しあうと同時に相互に排斥しあう矛盾の関係にあって、そのままでは交換過程は行きづまるほかはなく、商品の全面的交換は行なわれえず、したがって、商品生産は社会的生産の一つの形態として成り立ちえないことになる。そこで、交換過程は必然的に、この矛盾を媒介するものとしての貨幣を生み出すことになる。(『貨幣論』、一二三四ページ)

しかしここばかりではなく、現に富塚氏が引用して、これはスミスと同じ考えだといっている個所のなかでも、先生は次のように言っておられます。

……この場合、亜麻布を生産した労働は……社会的に有用な形態で支出された人間労働の一定量として、その生産物である亜麻布の価値を形成しているはずなのだけれど、それにもかかわらず、亜麻布は価値として実現されるわけにいかない、……そしてこのように、価値として実現されえないかぎり、それは使用価値としても実現されえないことになる……したがって、そのままでは、商品生産は社会的生産の一つの形態として成り立ちえないことになる。

これを引用しながら富塚氏は、久留間氏が交換過程の矛盾だといっているものは実際には「交換欲望のすれ違いによる交換の不成立」のことであって、アダム・スミスが説いていることと同じだ、ときめつけているのですが、商品の「価値としての実現」とか「使用価値としての実現」とかといったようなことを、どこかでスミスはいっているでしょうか。考えてもいないでしょう。このような基本的な違いがあるのに、それが目にはいらないというのは、いったいどうしたことなのでしょう。鹿を追う者は山を見ない、とでもいうのでしょうか。

久留間　富塚君が「交換欲求のすれ違いによる交換の不成立」といっているものは、一つの重要な現実の問題なのであって、スミスの欠陥はこれを問題にした点にあるのではなく、使用価値および価値の直接的統一としての商品の内在的な矛盾が実際に商品が交換される過程で露呈する矛盾の一つであるものを、そういうものとしてとらえなかった点にあるのです。だからマルクスは、この種の学説を批判して次のように書いています。

……経済学者たちは、拡大された交換取引がつきあたる外部的な困難から貨幣を導きだすのをつねとしているが、そのさい彼らは、それらの困難は交換価値の発展、したがってまた一般的労働

としての社会的労働の発展から生じるものだということを忘れている。たとえば、こうである。商品は使用価値としては分割可能ではないが、交換価値としては任意に分割可能でなければならない、と。あるいは、Aの商品はBにとっての使用価値であるのに、Bの商品はAにとっての使用価値でないかもしれない、と。あるいは、商品所有者たちは、互いに交換しようとする分割できない商品を、不等な価値比率で需要することがありうる、と。換言すれば、経済学者たちは単純な物々交換を考察するという口実のもとに、じつは使用価値と交換価値との直接的統一としての商品の定在が包み隠している矛盾のいくつかの側面を具体的に示しているのである。ところが他方、彼らは一貫して、商品の交換過程の十全な形態であるとして物々交換にしがみつき、それにはただいくつかの技術的不便が結びついているだけであり、この不便に対処してたくみに考案された方便が貨幣である、というのである。……(『経済学批判』、全集訳、第一三巻、三四―三五ページ、『レキシコン』⑪、一四五ページに引用)。

富塚君が久留間説はスミスと同じだという場合、スミスと同様に久留間もまた、商品の矛盾のあらわれであるところのものを単なる物々交換の不便としてしかとらえていない、というのであれば、それはさきにA君がいわれたように、無責任な放言あるいは悪い意図をもった誹謗としか考えられないわけですが、もしかすると富塚君は、スミスが誤って物々交換の技術的不便としてとらえている、商品の矛盾の交換過程における現象の一つの側面を、そのようなものはマルクスが交換過程に含まれている矛盾といっているものとは違っている、と考えているのかもしれない。もしそうだとすれば、その誤りは右に引用した個所でマルクスが述べていることを虚心坦懐に読んでみればわかるはずです。スミスは重要な意味をもつ現実の事象を問題にしているのだけれど、商品生産を社会的生産の自然的な形態だと思いこんでいたために、それを商品に固有な矛盾の一つのあらわれとしてとらえることができなかった。これは当時としてはやむをえなかったことであって、「スミスと同じだ」といってひとをやっつけた気になっているような自信家とは違って、既得の知識の不足を補うためにどこまでも努力した、謙虚な、だから本当にえらい学者だったのです。

A 話をだいぶわき道にそらすようなことになってすみませんでした。ここらでもとの問題にたちかえりたいと思います。

交換過程論との関連からみた商品変態論の本来の意味についての先生のお考えは、今までのお話でよくわかりました。残っているのは、これが「貨幣Ⅱ」の項目編成にどのようにあらわれているか、という問題ですが、これについてどうぞ。

久留間 この問題についてのマルクスの所論は、この「貨幣Ⅱ」の最初の項目「商品の変態」の最初の二つの下位項目、すなわち「1 商品の発展は諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾を取り除きはしないが、これらの矛盾が運動しうる形態をつくりだす」、および「2 諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾が運動しうる形態は、諸商品の価値をまず価格に転化させる貨幣の価値尺度としての第一の機能によって、どのようにしてつくりだされるのか? それらの矛盾は、この形態において、現実にはどのように運動するのか、そしてそれらの矛盾は、この運動によってどのように解決されるのか?」のなかに収録されています。

同じ言葉がいつも同じ意味で使われているとは限らない――アウフヘーベンという言葉に関連して――

C ちょっと横道にそれるかもしれませんが、そのうちの1の表

題は「商品の発展は諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾を取り除きはしないが、それらが運動しうる形態をつくりだす」となっていて、そのなかに疑問の種になるかと思われる文句があるので、このさいついでに説明しておいていただいたらと思うのです。その文句というのは、「……諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾を取り除きはしないが……」という文句です。この「取り除きはしないが」という場合、マルクスは何を考えているのでしょうか。

久留間　商品の交換過程に含まれている諸矛盾は、貨幣が形成され、その媒介によってW—WがW—G—Wになることによって一応は解決されることになるが、それと同時に、本来は一つであったW—Wの過程がW—GおよびG—Wの二つの過程に分裂することになり、その結果、商品所有者はW—Gを行なった後にG—Wを行なわない可能性が生じることになる。簡単な商品流通を考察する場面では、W—GとG—Wとの分離がどのような原因によって現実に生じるかは問題になりえないけれども、分離の可能性が生じることは明らかになる。これが、いわゆる恐慌の形式的な可能性なのです。「矛盾を取り除きはしないが」といっているのは、矛盾がこのように新たな形で再現することを、あらかじめ注意しているのでしょう。この問題についてのマルクス自身の叙述は、『レキシコン』の⑥（恐慌Ⅰ）の「Ⅲ　貨幣は直接的な交換取引の諸矛盾を止揚するが、しかし、それはただ、この諸矛盾を一般化することによってである」、および「Ⅳ　商品流通のもとで現われる恐慌の可能性」のうちに収録してあります。

D　いま問題になった「……諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾を取り除きはしないが……」という場合の「取り除く」は aufheben の訳ですが、この問題についてのマルクス自身の叙述を収録してある個所の一つとしてあげられた『レキシコン』の⑥のⅢの表題は「貨幣は直接的な交換取引の諸矛盾を止揚するが……」となっていて、この「止揚」も aufheben の訳ですね。だとすると、ドイツ語の原文では、前の場合には「アウフヘーベンしはしないが」といい、後の場合には「アウフヘーベンするが」といっていることになり、矛盾したことをいっているように思えるのですが……

久留間　それは、アウフヘーベンというドイツ語自身が一義的でなく、違った意味で使われることから来ているのでしょう。アウフヘーベンの「アウフ」は「上」を意味し、「ヘーベン」は「持ちあげる」という意味で、アウフヘーベンはもともと、テーブル・クロスを持ち上げて取り去ることを意味したのが、このことはとりもなおさず食事の終了を意味するものにほかならないという関連から、転じて、一般にあることを終了あるいは廃棄するという意味に使われるようになったのだそうです。ところがヘーゲルは、この言葉を弁証法に結びつけて独自の意味に使うようになった。すなわちある矛盾をアウフヘーベンするということは、矛盾をある特定のあり方において否定すると同時に、それをより高次のあり方に高めて保存することを意味するのだ、というわけです。さきに問題になった例についていえば、「諸商品の交換過程に含まれている諸矛盾をアウフヘーベンしはしないが」という場合の「アウフヘーベン」は在来の普通の意味、すなわち終了、終結、あるいは廃棄の意味で使われており、「……の諸矛盾をアウフヘーベンするが……」という場合の「アウフヘーベン」はヘーゲル的な意味で使われているのです。だから『レキシコン』では、前の場合のアウフヘーベンは「取り除く」と訳し、後の場合のアウフヘーベンは「止揚」と訳してあります。もし前の場合のアウフヘーベンを「止揚」と訳すると——長谷部ではそうなっていますが——とんでもない誤解を生じることになります。この場合には、商品の交換過程に含まれている矛盾を止揚しないのではなく、それを、商品の変態という運動形態に止揚するのです。

なお、これと同じような問題は Umlauf という言葉についても生じます。これは後に触れることにしましょう。

価値尺度論は商品変態論にとってどのような意味をもっているか

A では次に移りましょう。いままでのお話で、交換過程論と商品変態論との関連はよくわかりましたが、『経済学批判』でも『資本論』でも、「商品の変態」の項目の前に「価値の尺度」の項目がおかれています。この価値尺度論は商品変態論にとってどのような意味をもっているのか、これが疑問の種になろうかと思いますが、これについてはどのようにお考えでしょうか。

久留間 その点については、昨年末に出版した『貨幣論』の後篇のなかに、ぼくの考えをかなりまとまった形で述べている個所があるから、とりあえずそれを紹介することにしましょう。これは宇野弘蔵君が

マルクスは「普通の商品と貨幣商品との交換」の「素材的要素である商品と金との交換をのみ固執すると、人はまさに見なければならぬもの、即ち形態についておこることを看過する。人は、単なる商品としての金は貨幣ではなく、また他の諸商品は、その価格において、彼等自身の貨幣態容としての金に関係するということを看過する……」といっているのであるが、「形態について起ることが、価格形態における金の貨幣化によって商品が価格を付せられるということですまされてよいということにはならない。先きにも指摘したように、商品に価格が付けられるということは、商品がもはや自らは貨幣に対して交換を要求しえなくなり、貨幣のみが進んで商品を購買しうるものになることであった。価値形態の発展としての「貨幣形態」の意義は、そこにあったのである。したがって貨幣の第一の機能は、商品価値の「貨幣形態」に対して、自ら商品価値を実現するものとしての購買にあるのであって、商品の側からの販売は、むしろその裏をなす、受動的なることが明らかにされなければならない。

といってマルクスを批判しているのに対してぼくが反批判している個所です。そこでぼくは次のようにいっています。

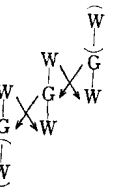
ここで宇野君が『資本論』から引用してそれについて言っていることは、忌憚なくいえば無理解の見本みたいなものです。マルクスがここで言っていることは、商品が販売されて現実の金になるということは、価格が実現されるということであって、商品の価値の価格への転化（したがってまた、この転化における貨幣の役割――価値尺度としての貨幣の機能）を前提するのだということ、金は商品にとって単に他の一商品であるのではなく、商品自身の価値の姿なのだということ、商品の販売（W―G）は、単に商品が他の一商品としての金と交換されるということではなくて、価格においてすでに観念的にそれであったこの自分自身の価値の姿――金――に現実に転化することであり、商品自身の形態変換にほかならぬのだということ、ところが表面的には、商品の販売は、単に商品と金との交換として現われるので、人々はこの「素材的要素」に注意を奪われて、肝心かなめの「形態について起ること」、すなわちこの形態変換の事実を看過することになるということ――大体こういうことを、マルクスはここで言っているのです。

ここでマルクスが「形態について起ること」といっているのは――それはすでにいま述べたところで明らかになっているはずだとは思うけれど、いま一度念のために事態に即して説明すると――直接的な商品交換W―Wは、貨幣ができるとその媒介によってW―G―Wになり、商品は、商品形態から貨幣形態への転形W

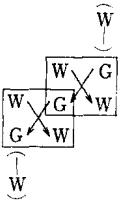
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

—Gと貨幣形態から商品形態への再転形G—Wの二つの形態変換の過程を通して運動することになる、この商品の形態変換のことを、マルクスはここで、「形態について起こること」と言っているのです。

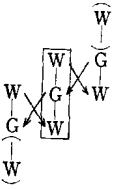
ところが、ある一商品の第一変態W—Gは必然的に他の一商品の第二変態G—Wとからみあい、また第二変態G—Wは第三の商品の第一変態W—Gとからみあう。すなわち一商品の総変態W—G—Wは、



という、他の二つの商品の変態とのからみあいにおいて行なわれることになる。ところが、この図式に表示されている全関係のうちで表面的に現象するのは、「普通商品と貨幣商品との交換」の「素材的要素である商品と金との交換」、すなわち



の関係なので、「人は」とかくこの現象にとらわれて、「まさに見なければならぬもの、すなわち形態について起こること」を、すなわち全体の基礎をなしている



の関係を、看過することになる。このことを、マルクスはここで警告しているのです。

そしてそれにつづいてマルクスが、「人は、単なる商品としての金は貨幣ではなく、また他の諸商品は、それらの価格において、それら自身の貨幣態容としての金に関係するということを看過する」と言っているのは、さきにも述べたように、商品の販売W—Gは、単に商品と金との交換なのではなく、商品の価格の実現なのであり、商品の価値の価格への転化を前提するのだということ、金は商品にとって、単に他の一商品なのではなく、それ自身の価値の姿なのであり、価格においてすでに商品は、この自分自身の価値の姿としての金に関係しているのであり、販売は、価格においてすでに観念的にそれであったこの自分自身の価値の姿に、商品が現実に転化することであり、商品形態から貨幣形態への商品自身の変態にほかならないのだということ、ところがこの基本的に重要なことが、一般人の眼には映らないで、人々は、一方にとっての販売は他方にとっては購買であり、販売においても購買においても商品と金との交換が行なわれるという、表面的な事実に注意を奪われて、その根底に横たわっている、この、商品の形態変換の事実に気がつかないということ——こういうことを、ここでマルクスは警告しているのです。

ですから、マルクスはけっして宇野君の言うように、「『形態』について起こることが、価格形態における金の貨幣化によって商品が価格を付せられるということですまされてよい」などとは言っていない。ここで言っていないばかりでなく、どこでも言っていない。それどころではなく、価値は価格の形態においてはじめて、実現さるべきものとして現われるのだということを、いろいろの個所で力説しているのです。(『貨幣論』、二四二—二四五ページ)

以上は、一五・六年前に雑誌『思想』に発表し、昨年出版した

『貨幣論』の後篇に再録したもののなかから引用したものですが、さきに提出された問題についてのぼくの考えはだいたいこれでわかってもらえるだろうと思います。なお、この問題に関連するマルクスの叙述は、この前の「貨幣Ⅰ」のなかの第二篇の第一章「価値の尺度」の下位項目1と14、それから、今度の「貨幣Ⅱ」のなかの「Ⅰ 商品の変態」の下位項目2、5、6に収録してあります。

商品の変態と貨幣の通流

A いままでのお話で、交換過程論と商品変態論とのあいだの有機的な関連、商品変態論の前に置かれている価値尺度論が商品変態論にとってもつ本質的な意義がよくわかりました。しかしこれは「貨幣Ⅱ」に直接関係する範囲のことで、『資本論』のうちの交換過程論に先行する部分が貨幣論にとってどのような意味をもつか、という問題には及んでいません。これについては、昨年刊行された先生の『貨幣論』のうちに、とくにその前篇の「二、貨幣の成立についての問題設定とその解明――どのようにして、なぜ、なにによって――」と「六、なぜの問題の根本はどういうところにあるのか――商品生産の特殊な性格と価値の本質――」のなかで詳細に論じられています。これらの個所に書かれていることと、いま先生が話されたこととを合わせて考えてみると、『資本論』がどんなに考えぬかれた緊密な理論体系であるかが痛感されます。と同時に『資本論』を読む場合にこのことに十分留意して読まないと、木を見て森を見ないことになるということも痛感するわけです。

ところで、今までに問題にしたのは、商品変態論とそれに先行する部分との関連ですが、つぎには、商品変態論とそのあとに続く部分との関連を問題にしたいと思います。しかしこの問題についても、先生はどこかでかなり詳しく説明されていたように思うのですが……

久留間 そうだったかな……それはどこだったかしら……

B それは昭和二三年――だから三二年も前に――刊行された『高野岩三郎先生喜寿記念論文集』に先生が寄稿された論文（現在は、大月書店発行の先生の『恐慌論研究』のうちに「物価と通貨と需要」という表題をつけて再録されている）のなかです。

久留間 そこでぼくはどんなことをいっていたかしら……

B それではそのなかの、いまの問題に関係がある部分を読んでみましょう。

……購買手段なる語は、直接には、商品の循環を形成する対立する二つの変態の過程――すなわち販売（W―G）および購買（G―W）――のうちの後者における貨幣の規定をあらわすにとどまる。すなわち流通手段をはじめから購買手段として把握することは、商品の変態の第二の過程における貨幣の規定をその前提たる第一の過程と無関係に、したがってまた、一般的に商品の変態そのものと無関係に、把握することを意味し、G―WのGをW―Gの結果として、すなわち商品そのものの脱皮した価値の姿として把握するかわりに、それ自身に独立した存在をもつものとして把握することを意味することになる。そしてその結果は、貨幣の運動を商品の変態運動の現象として把握するかわりに、商品の運動を貨幣の運動の結果として把握することになり、かくして、貨幣の通流の正しい認識の途はまったく見失われてしまうことになる。それゆえマルクスは、「貨幣の通流」に関する彼の考察を、流通手段の購買手段としての現象の批判から始めているのである。

「現実の流通は、直接には、偶然的にならびおこなわれる多数の購買および販売として現われる。購買においても、販売においても商品と貨幣とはつねに同一の関係において対立する。販売者

は商品の側に、購買者は貨幣の側に。それゆえ、流通手段としての貨幣はつねに購買手段として現われ、かくして商品変態の対立的段階における貨幣の異なれる諸規定は認められなくなっている。」（国民文庫『経済学批判』、一二五ページ）〔全集訳、第一三巻、八〇ページ〕。

ではかような現象はなぜ生じるのか。対立的な二つの段階を経過する商品の変態運動は、なぜつねに、貨幣が商品と転換するモノトナスな運動として現われるのか、商品変態の二つの段階において本来異なった規定性をもつところの貨幣は、なにゆえに購買手段としてのみ現われるのか、貨幣の運動は商品流通のあらわれであるにかかわらず、なにゆえ商品流通は貨幣の運動の結果として現われるのか。マルクスは進んでこれらの転倒的現象の生じるゆえんを明らかにする。かくて、従来の経済学によってそのまま無批判に受け入れられ、その結果彼らの脳裡に転倒的な理論の映像を結んだこれらの現象は、マルクスにおいては、商品変態の必然的な現象として、本質に即して理解されたものとなり、商品変態論の発展としての貨幣通流論*のうちに見事な結晶（貨幣通流の諸法則）を生じたのである。貨幣の流通量に関する法則もまたそのひとつに属する。（上掲書、一八六―七ページ）

なお先生は、右の引用の終りに近い所に注をつけて（原文では注(2)になっているが、ここでは他の注は省略したので、かりにアステリック*で表示した）次のように書かれています。

* 諸商品の変態運動とそれらの相互の縺れあいとがどのようにして貨幣の通流を規定するかは、一八九―一九〇ページに掲載の図形によって比較的容易に理解されうると思う。なおこの図形は右の関係だけでなく、商品流通のその他の基本的諸関係をも――簡明の主旨を害しないかぎり――できるだけ取り入れて総合的に図示する目的で考案したものであるが、なお多くの欠陥をまねかれない。識者の補正によって改善されればさいわいである。

そしてこのあとに、「商品の変態と貨幣の通流」と題する例の図形が挿入されているのです。

C その図形には、それから何を読みとるべきかを指示する九項目の注意書きが添えられていますが、これを参考にしながら図形をみると、商品の変態と貨幣の通流とについてマルクスがいろいろ書いていることが――それを読んだだけでは容易にわかりにくいことが――一目瞭然となる思いがします。たいへん便利なものです。このことは、ぼくがそう感じるだけではなく多くの人もそう感じるとみえて、先生がこれを公表された以後、多くの先生がたの著書に、もとのままの形でか、多少の変形――といってもべつに改善されているわけではないが――を加えて掲載されています。しかしほとんどの著者は、この図形が先生の考案によることをことわってはいません。だから現在では、こうした図形がもともと先生が考案されたものであることを知る人はまれなのではないかと思います。

なおこの図形は、この「貨幣Ⅱ」のなかの「貨幣の通流」の「1 商品流通と貨幣の通流」のあとに、「編者による付録」と題して収録されていますが、ドイツ語にも訳してあるので、外国の読者のあいだでどのように評価されるか、楽しみです。

D そのドイツ語訳に関連することですが、あれは、最初大谷さんが訳したものをちょうど東独に行く機会があった宇佐美さんに託してそこのある学者に見てもらったところ、なるほどと思われる用語上の改訂をしてくれたのはよかったが、七番目の注記の意味が理解できないようだったとか……

久留間 見てもらったドイツ語訳がドイツ語として達意でなかったせいなのか、それとも書いてあることの内容そのものが理解できなかったせいなのか、その点はよくわからないが、とにかくそうい

う結果になったようです。しかし、この七番目の注記に書いたことは内容的にきわめて重要なので、いいかげんにしておくわけにはいかない。そこで新しいドイツ語訳をつくる必要が生じたのですが、もともと、この七番目の注記に書いたことは、「貨幣Ⅱ」のなかの引用番号〔176〕に収録してあるマルクスの叙述の内容を図表に適合するように自分なりにいい表わしたものなのですから、この改訳の仕事は比較的容易でした。というのは、いまいった個所のマルクスの文章を大部分そのままにして、わずかの個所を図表に適合するようにかえればよかったからです。この部分のドイツ文がもとの日本文に対応していないのは、このような事情によるのです。

C　いまいわれた引用番号〔176〕は、「商品の変態」の最後の下位項目7のなかにありますが、この7では新産金にかんするいろいろの問題が論じられております。先生はこれらの問題を三つに大別し、表題では、a)、b)、c)の三つの項目を掲げてそれぞれの意味を明らかにしておられますが、実際には、三つの項目を設けて編集されていません。これはどういうわけなのでしょうか。

久留間　この項目7には、いまC君がいわれたように、事実上新産金に関係するマルクスの所説が収録されており、そしてそれらの個所でマルクスは、ぼくがa)、b)、c)に分けた問題のどれかについて論じていることは事実ですが、しかし多くの場合、それらの問題のうちのただ一つではなく、二つまたは三つについて同時に論じているのです。ですから、もし実際に三つの項目を設けてマルクスの所説を編集することにすれば、同じ個所を二度も三度も重ねて引用しなければならぬことになります。その無駄をはぶくために、実際には全部いっしょにして編集したわけです。しかしそれらの個所で論じられていることには三つの問題がある。このことをわきまえて読んでもらうことが大切だと考えたので、表題のなかにそのことを書き入れたわけです。

貨幣の通流は商品流通の一契機であり、商品流通によって規定されている

A　それでは次に移りたいと思いますが、「貨幣Ⅱ」の主題である「流通手段」の「Ⅰ　商品の変態」は、いま問題にした新産金の問題を取り扱っている下位項目7で終っています。その前にいろいろの下位項目があるわけですが、そのそれぞれの意味は、改めて説明するまでもなく、一々の表題を見れば容易にわかるだろうと思われたので問題にしませんでした。ただ、これらのうちには、番号の肩にダッシをつけたのが二つあります。3′と4′とです。このようなダッシをつけた項目を設けた理由については「貨幣Ⅰ」に挿入してある「栞」のなかで説明されていますから、それを見てもらうことにして、これから次の項目「貨幣の通流」に移りたいと思います。

「流通手段」の第二の項目は、『レキシコン』のこの巻でも、『経済学批判』や『資本論』と同じように、「貨幣の通流」になっていますが、その最初の下位項目は「商品流通と貨幣の通流」という独自の表題がつけられています。これについてなにか……

久留間　貨幣の通流にかんするいろいろの問題――その運動の仕方、通流する貨幣の量や通流の速度にかんする諸法則――を明らかにするために何よりもまず必要なことは、貨幣の通流は商品流通の一契機であって、本来的には商品の流通によって規定されているのだ、ということを確認することです。「貨幣の通流」の最初に「商品流通と貨幣の通流」という項目を設けたのはこのことをはっきりさせるためです。この項目に収録されているマルクスからの引用を読んでみれば、商品流通と貨幣の通流との関係がよくわかるだろうと思います。

B　いまのお話で、まず最初に商品流通と貨幣の通流との関係を

明らかにする必要があるということはわかりますが、いったい商品の流通とは何のことなのか、また貨幣の通流とは何のことなのか、これがはっきりしていないと困ると思います。貨幣の通流については、これからのお話で次第にはっきりしてくると思いますが、商品流通は貨幣通流論では前提されているので、この際その意味をはっきりさせておく必要があるかと思います。商品流通という言葉は一般的には、何だかわかりきったもののように、いわば無反省に使われているように思いますが、よく考えてみると、その意味がはっきりしていないことに気付きます。この言葉の厳密な規定はどうなのでしょうか。

久留間　この商品流通という言葉は、マルクス自身も一義的に使ってはいません。しかしそれは、でたらめに使っているというのではありません。この言葉をマルクスは、最初には商品の変態と同義に使っています。その例、

よく観察してみると、流通過程は二つの異なった循環の形態を示している。商品をW、貨幣をGと名づけるならば、この二つの形態は次のように表現することができる。

W—G—W

G—W—G

この節では、もっぱら第一の形態、すなわち商品流通の直接的形態を取り扱うことにしよう。（『経済学批判』、全集訳、第一三巻、七〇ページ）

ところが、ある商品の変態は他の商品の変態と無関係には行なわれえない。ある一商品のW—Gは他の商品のG—Wと、また一商品のG—Wは第二の他商品のW—Gとからみ合う。この関係を考慮に入れるとき、「商品流通」の意味内容はいっそう包括的になります。すなわち、

ある一つの商品の循環をなしている二つの変態は、同時に他の二つの商品の部分変態をなしている。……こうして、各商品の変態列が描く循環は、他の諸商品の循環と解きがたくからみ合っている。この総過程は商品流通として現われる。（『資本論』I、全集訳、第二三巻、一四八ページ）

しかしそればかりではなく、各商品の変態のからみ合いの連続的な進行は、必然的に、貨幣の通流を措定することになる。したがって、貨幣の通流もまた、結局、「商品流通」の一契機を形成することになるのです。

E　いまのお話のなかで、商品流通という言葉が最初に商品の変態と同義に使われ、そのあとで商品の変態のからみ合いを含むものとして使われているということは、十分なっとくできることですが、貨幣の通流もまた商品流通の契機をなすということは、ちょっとわかりにくいのですが……

久留間　もちろん、それぞれの商品の変態とそれらのからみ合いとのあいだの関連と、このからみ合いと貨幣の通流とのあいだの関連とのあいだには、違った点があります。前者は商品の運動の問題であり、後者は貨幣の運動の問題です。それからまた、貨幣の通流は商品流通によって規定されるのだ、ということも事実です。しかしこのことは、商品流通が貨幣の通流を規定しながらそれを自らの一契機としてその圏内に包摂することを否定するものではないでしょう。現に『資本論』では、第一篇「商品と貨幣」の第三章は「貨幣または商品流通」と題されており、その内容は価値の尺度から第三の規定性における貨幣——価値の尺度と流通手段との統一としての貨幣——に及んでいます。もっと限局して当面の問題に直接関係する点についていえば、「貨幣または商品流通」の第二節「流通手段」のaは「商品の変態」、bは「貨幣の通流」をテーマにしています。これによってみても、「貨幣の通流」が「貨幣または商品流通」の内部の問題と考えられていることは確かでしょう。

しかし、これはいわば局部的な問題です。もともとマルクスは、「商品流通」を、きわめて豊富な規定を含蓄する概念として把握しているのであって、さきに見たように、「貨幣または商品流通」の章のなかで、そのもろもろの契機を一定の見地から――弁証法的見地からといってもよいでしょうが――順次に展開しているのだ、と解すべきではないでしょうか。

なお念のためにつけ加えますが、マルクスはある個所で、貨幣流通が「商品流通の一契機」であることを明記しています。「貨幣流通そのものは、商品流通の一契機として、貨幣取引業にとっては与えられているのである。」(『資本論』Ⅲ、全集訳、第二五巻、四〇〇ページ)

B 先生の例の図表は、いまいわれたような包括的な意味での商品流通のもろもろの契機――商品の変態、それらのからみ合い、それによって規定される貨幣の通流――のあいだの関連を実にうまく表現していると思うのですが、あの図表は「商品変態と貨幣の通流」となっていて、商品流通という言葉は出ていません。これはどういうわけなのでしょうか。

久留間 あの図表は、商品流通の基本的契機をなす商品の変態(それらのからみ合いを含む)と貨幣の通流との規定関係を明らかにすることを直接の目的としたものであって、これに「商品の変態と貨幣の通流」と題したのは、この主旨を表示しようとしたからです。これは、『経済学批判』や『資本論』で「流通手段」の第一の項目が「商品の変態」、次の項目が「貨幣の通流」となっているのに適合することにもなるわけです。もし表題のなかに「商品流通」という言葉をとり入れるとすれば、これを主題として掲げ、「商品の変態と貨幣の通流」を副題とすべきでしょう。そうしたほうがよかったかもしれません。

貨幣の還流運動という項目を設けた理由

A それでは次に移りたいと思います。いままでに問題にしたのは「Ⅱ 貨幣の通流」の1の「商品流通と貨幣の通流」ですが、そのあとに1′として「貨幣の還流運動――通流に対立する運動形態」という項目が設けられています。この項目を設けられた意図というか……

久留間 1の「商品流通と貨幣の通流」では、とりわけ、簡単な商品の流通によって規定されるかぎりでの貨幣の運動の形式が考察されたのですが、それは、貨幣がたえず出発点から遠ざかるということでした。簡単な商品の流通の場合には、ある商品の姿態変換W_1―G―W_2はW_2で終了するのです。この場合の過程の連続性は、一々の商品の姿態変換の連続性にあるのではなく、諸商品の姿態変換のからみ合いの連続的進行の形でのみ存在するのです。そして、これによって規定される貨幣の運動を特徴づけるものは、たえず出発点から遠ざかるということでした。(ちなみに、この関係は例の図表――とくにそれへの注記の5――を見れば一目瞭然となるでしょう。)マルクスはこの、たえず出発点から遠ざかるという規定性における貨幣の運動を、貨幣の Umlauf――現在では「通流」という訳語がほぼ定着しているようですが――と呼んでいます。もっとも、これは『経済学批判』以後のことで、『経済学批判要綱』では、「資本のウムラウフ」というふうに、「循環」の意味に使っている例もあります。これを「資本の通流」と訳すと、とんでもない誤解を生じるおそれがあります。もともと Umlauf というドイツ語には、「走り回る」という語義もあれば、「ぐるっと回る」、すなわち循環と同じ語義もあるのです。

話がちょっと横道にそれましたが、今までに見てきたのは、簡単

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com